

イザヤ書 63 章 19b-64 章 8 節

コリントの信徒への手紙一 1 章 1-9 節

マルコによる福音書 13 章 33-37 節

本日から教会歴の上では、新しい一年が始まりました。アドベント・キャンドルの一本目が点灯されましたが、その意味は、「希望」だと言われています（所説あります）。本日の旧約日課には、「希望」という言葉はありませんが、その内容の中に「希望」を見出すことができます。

本日の個所に見いだされる希望は、抽象的な概念として語られているではありません。主なる神様の王国、イスラエルの崩壊という歴史的出来事に基づいた、そこからの回復という具体的な事柄を含んだ希望を語っています。それゆえ、聖書日課は「あなたが天を裂いて降りて来てくださったなら、山々は御前に揺れ動くでしょうに」（イザヤ 63：19b）から始まっていますが、その前には、「私たちははるか昔からあなたに統治されない者、あなたの名で呼ばれない者となっています」（イザヤ 63：19a）と、預言者イザヤは、自分たちイスラエルのあり方を回顧しています。主なる神様が統治するはずであるイスラエル王国の崩壊を、単なる歴史的な社会情勢の移り変わり、指導者たちの政治的判断・選択の誤りとは考えず、そこに主なる神様の意思が働いたと考えるのです。

それゆえ、64章5節で「あなたは迎えてくださいます、喜んで正義を行う者をあなたの道を進みながらあなたを思い起こす人々を。しかし、あなたは怒られました。私たちは罪を犯し、久しくその罪の中にいます。私たちは救われるのでしょうか？」と語り、王国の崩壊を、自分たちの罪の結果と受け入れて、自分たちに救いはあるのかと問いかけるのです。

この64章5節は、新しい「聖書協会共同訳」と「新共同訳」では大きく異なります。新共同訳は、「喜んで正しいことを行い、あなたの道に従って、あなたを心に留める者をあなたは迎えてくださいます。あなたは憤られました。わたしたちが罪を犯したからです。しかし、あなたの御業によって、わたしたちはとこしえに救われます。」とあり、ことに最後を主なる神様の救いへの確信で終わるように訳していました。しかし、さらに前の口語訳は、「聖書協会共同訳」と同じように「あなたは喜んで義を行い、あなたの道にあって、あなたを記念する者を迎えられる。見よ、あなたは怒られた、われわれは罪を犯した。われわれは久しく罪のうちにあった。われわれは救われるであろうか？」と、最後を疑問文で訳していました。最後の「私たちは救われる」は、文脈の解釈次第で、肯定とも疑問とも訳すことが可能です。ここは「聖書協会共同訳」と「口語訳」の通り、疑問文に取るのがよいと思います。この部分は、主なる神様とは、「喜んで正義を行う者」を喜んで受け入れる方であると認識しつつも、自分たちはそうではなかった、「私たちは罪を犯し、久しくその罪の中にいます」と認識しているからです。それゆえ、救いの確信ではなく、反省を含めた問いかけにつながると考えるほうが自然であるからです。

ただし、「救われるのであろうか」という疑問だけであるならば、希望はあまり感じられません。しかし、預言者イザヤは、そこに主なる神様の関与があると信じるがゆえに、主なる神様に立ち返ることによって、イスラエルには希望があると確信するのです。だからこそ、「新共同訳」は、64章5節の最後を肯定文にしたのかもしれませんが、預言者イザヤは、イスラエルの民が主なる神様に立ち返れば、そのまま自動的に救われるとは思っていないのです。そのことが64章7、8節に表れています。そこでは、「しかし主よ、今、あなたは私たちの父。私たちは粘土、あなたは陶工。私たちは皆、あなたの手の業です。どうか主よ、激しくお怒りにならないでください。いつまでも過ちを覚えていないでください。どうか主よ、激しくお怒りにならないでください。いつまでも過ちを覚えていないでください。御覧ください。私たちは皆、あなたの民です」と、自分たちは、「陶工」である主なる神様の「粘土」に過ぎないのであり、そうであるがゆえに、主なる神様に信頼するしかないと告げます。預言者イザヤがここで語る希望とは、立ち返れば必ず救われるという希望ではなく、イスラエルがすべきことは、主なる神様に信頼することのみという希望です。8節の最後は、「聖書協会共同訳」では、「御覧ください。私たちは皆、あなたの民です」ですが、「新共同訳」では、「あなたの民であるわたしたちすべてに目を留めてくださるように」、口語訳では「どうぞ、われわれを顧みてください。われわれはみな、あなたの民です」と微妙に異なります。しかし、語っていることは同じで、主なる神様にただただ自分たちを見てくださいと願うのみで、この個所を終えています。

それでは、預言者イザヤ書が語ったこの希望は、どのような形で叶うのでしょうか。その問いに対する答えは、65章17節の「見よ、私は新しい天と新しい地を創造する。先にあったことが思い出されることはなく、心に上ることもない」という有名な箇所に見いだされます。それは、それまでであった王国の復興ではなく、以前とは異なる新しい世界です。

わたしたち教会に集められるものは、その希望すなわち新しい天と地の創造の始まりと完成を、イエス様の出来事に見ます。だからこそ、イエス・キリストの誕生を祝う、クリスマス、それを迎えるための備えのアドベントの降臨節第一主日にこの個所から学ぶのです。今年も、わたしたちは、わたしたちが生きている世界の中に、戦争、争い、混乱、貧困、抑圧など、ありとあらゆる悲しみがある中で、クリスマスを迎えます。それらの悲しみが一日も早く終わることを心から望むのですが、そのような世界であっても、どのような混乱があっても、わたしたちはイエス様を通して、希望を失うことはないのです。わたしたちの住んでいる地域は、まだ世界的に見て平和と言えるかもしれません。だからこそ、わたしたちには、使命があります。わたしたちの東京聖三一教会は、様々な面で与えられた恵みの多い教会です。だからこそ、使命があります。主なる神様に立ち返るとき、まことの希望があることを、預言者イザヤの言葉から学び、その希望の始まりであり完成者である、イエス様をより深く信じる時、希望が決して無くならないことを示す使命です。その証として、今年もできるだけ多くの方々と、そのご降誕を喜ぶひと時を過ごしたいと思います。